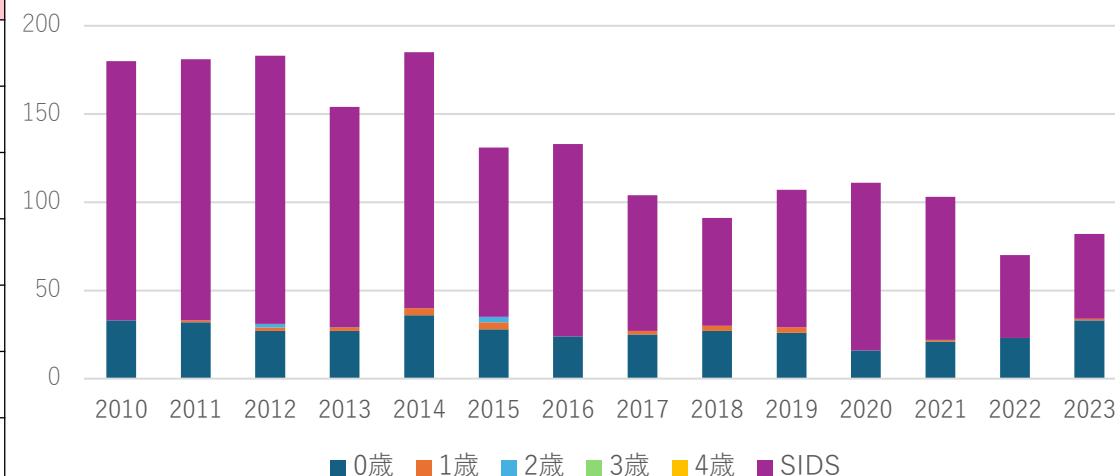


乳幼児の睡眠中における事故について

一般財団法人製品安全協会

乳幼児のベッド内での不慮の窒息事故死亡者数及び乳幼児突然死症候群（SIDS）による死亡者数（2010～2023年）

年次	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	0～4歳合計	SIDS
2010	33	0	0	0	0	33	147
2011	32	1	0	0	0	33	148
2012	27	2	2	0	0	31	152
2013	27	2	0	0	0	29	125
2014	36	4	0	0	0	40	145
2015	28	4	3	0	0	35	96
2016	24	0	0	0	0	24	109
2017	25	2	0	0	0	27	77
2018	27	3	0	0	0	30	61
2019	26	3	0	0	0	29	78
2020	16	0	0	0	0	16	95
2021	21	1	0	0	0	22	81
2022	23	0	0	0	0	23	47
2023	33	1	0	0	0	34	48
合計	378	23	5	0	0	406	1409



- 人口動態調査によれば、年間約30名程度の乳幼児が、ベッド内で不慮の窒息事故により亡くなっています。
- 乳幼児突然死症候群（SIDS）による死亡者数は、近年は減少傾向にあり、2023年は、48名でした。

0歳児の就寝時の窒息死事故の発生状況（2010～2014年の5年間での事故）

死因詳細	件数 (件)
不慮の窒息事故死（不慮の事故死502件中） [内訳]	400
就寝時の窒息	160
胃内容物の誤嚥	110
起動閉塞を生じた食物の誤嚥	50
起動閉塞を生じたその他の物体の誤嚥	20
その他の窒息	60

就寝時の窒息事故の状況	件数 (件)
顔がマットレスなどに埋まる	33
掛け布団等の寝具が顔を覆う・首に巻き付く	17
ベッドと壁のすき間などに挟まれる	13
ベッドからの転落に起因する窒息	7
家族の体の一部で圧迫される	5
ベッド上の衣類やクッション等で顔を覆われる	4
その他、詳細不明	81
合計	160

- 消費者庁が、厚生労働省「人口動態調査」の調査票情報を元に分析したところ、2010年から2014年までの5年間で、0歳児の就寝時の窒息死事故が、160件（不慮の事故死全体502件の32%）確認されています。

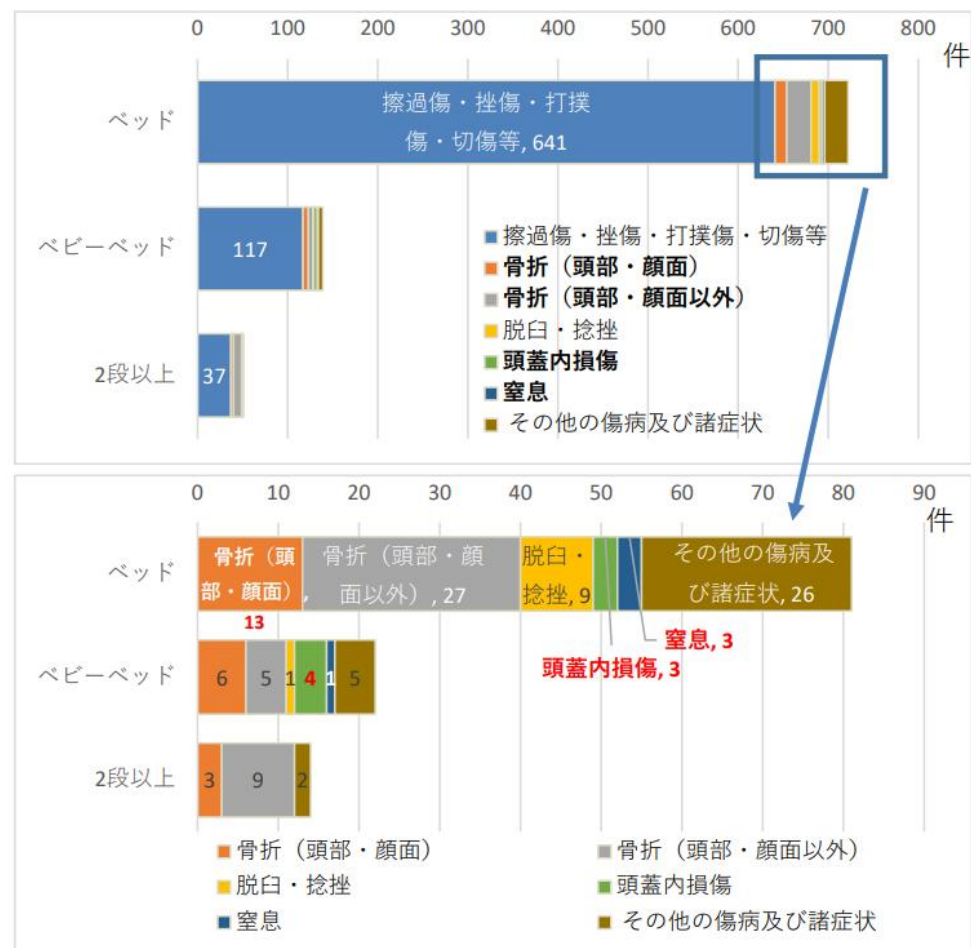
公的機関等において公表されている乳幼児用ベッドによる事故報告の件数

	死亡	重大製品事故 (30日以上)	中等症～軽傷	不明・ヒヤリハット	合計
隙間による窒息	2	2	0	0	4
隙間による脚の挟み込み	0	0	2	1	3
隙間による指の挟み込み	0	2	1	1	4
製品破損に起因する転落	0	0	9	5	14
製品破損に起因しない転落	0	1	3	1	5
部品脱落・誤飲	0	0	0	4	4
化学物質	0	0	4	0	4
成形不良(バリ)等	0	0	2	1	3
合計	2	5	21	13	41

- NITE SAFE-Lite（1994年～）、事故情報データベースシステム（2009年～）、日本小児科学会Injury Alert（2011年～）において報告されている乳幼児用ベッドによる事故の報告は、41件ありました。
- そのうち、隙間による窒息事故が死亡事故2件、重大製品事故が2件報告されています。

医療機関ネットワーク事業によるベッドからの 転落事故報告件数の内訳（2015～2020年）

	大人用ベッド	乳幼児用ベッド	その他ベッド	合計
0歳	433	101	0	534
1歳	122	31	7	160
2歳	51	5	7	63
3歳	46	0	11	57
4歳	33	1	12	46
5歳	21	1	7	29
6歳	16	0	7	23
合計	722	139	51	912



受傷内容の内訳

- 医療機関から消費者庁へ、2015年1月から2020年9月末までに寄せられた事故報告では、6歳以下の子どものベッドからの転落事故は912件ありました。
- そのうち、大人用ベッドからの転落と見られるものは722件、乳幼児用ベッドからの転落は139件、2段以上のベッド等からの転落は51件でした。

乳幼児がベッドで就寝中もしくは寝かされていた状態で発生した重大事件事例

発生時期	年齢	被害状況	事件事例	情報元
乳幼児用ベッドでの事故				
2019年10月	0歳3か月	頭蓋骨骨折、硬膜外血腫、くも膜下出血の疑いにより約2週間の入院	寝室の高さ 80cm のベビーベッドに乳児（3か月）を寝かし、柵を下げて保護者が入浴の準備をしていた。着替えと風呂の準備のため別室に行った際に、ドスツという音がして戻ると、ビニール性のクッション材の床に子どもが落下して仰向けで泣いていた。なかなか泣き止まなため救急外来を受診した。いつもは柵を上げていた。前日から寝返りが始まったところだった。	医療機関ネットワーク
2019年9月	0歳9カ月	意識不明の重傷	乳児（9カ月）を1人で当該ベビーベッドに寝かせていたところ、当該ベッドの柵とマットの間に挟まった状態で発見され、意識不明の重症を負った。	事故情報データベース
2019年6月	0歳	両側頭頂骨骨折、入院9日間	ベビーベッドの柵を上げずに使用していて、80cm くらいの高さからフローリングの床に子どもが落ちてしまった。保護者は同じ部屋にいて、2m 程度離れたところで作業をしていたが、落下した音で気が付き、見に行くと子どもが泣いていた。	医療機関ネットワーク
2019年6月	0歳8か月	死亡	乳児（8か月）を1人でベビーベッドに寝かせていたところ、当該ベッドの柵とマットの間に挟まった状態で発見され、後に死亡を確認した。保護者が、当該ベビーベッドに子供を寝かせて別室に移動後、子供の様子を見に戻り、子供を発見したときには、当該ベビーベッドの収納部分の扉が開いており、敷具と収納部分の上枠の隙間から、子供は足から肩までがベッドの外に出て、頭部はベッド内でうつ伏せで、意識及び呼吸の無い状態だった。保護者は、事故前には収納部分の扉は閉じていたと認識していた。	事故情報データベース
1998年10月	不明	意識不明の重傷	託児所で被害者が鉄パイプ製のベッドのすき間に首を挟んで宙ぶりになり、意識不明の重体となった。なお、当該ベッドは特注により設置していた。（改造品。規制対象外）当該製品は、「前枠下さん」と「ぬき」とのすき間が約10センチメートルあり、体がそのすき間から滑り落ち、宙ぶり状態となった。当該ベッドは大人用を乳幼児用に改造したもので、2枚のウレタン製のマットレスを敷いていたが、下側のマットレスは床板の幅より約8センチメートル狭く、端に寄ると上側のマットレスが斜めになり、滑り落ちやすくなっていたため、マットレスで口、鼻が押しつけられたことによるものと推定される	NITE SAFE-lite
1996年11月	0歳	死亡	託児所で乳児をベットの寝かせていたところ乳児が寝返りを打った際、スライド枠の隙間から足を下にして滑り落ちかけ、同箇所宙吊りとなり窒息死した。（特注品。規制対象外）当該ベットの扉は上下に開閉できるスライド式のもので、同扉には開き止めのフックが取り付けられていたが、事故当時、同フックの施錠をしていなかったため、乳児が寝返りをした際、スライド枠の隙間に手足の一部が入り、扉を上を持ち上げる状態となり、すべり落ち、木枠とベット床の隙間に挟まれ宙吊りになったものと推定される。	NITE SAFE-lite
その他（幼児用ベッドガード）				
2020年1月	0歳5か月	死亡	乳児（5か月）が幼児用ベッドガードとマットレスの隙間に挟まり、死亡した。事故発生時。使用者（母親）は、家事のため別室におり、被害者の兄が「被害者がぐったりしていると話したため寝室を確認したところ、被害者が当該製品とマットレスの間に挟まっている状態であった。	事故情報DB NITE SAFE-lite
2017年9月	0歳6か月	死亡	乳児（6カ月）がベッド用落下防止柵とベッドの隙間に挟まった状態で発見され、死亡が確認された。当該製品は、一般家庭の室内で使用する成人用ベッド及びマットレスと併用し、生後 18 か月から 60 か月の幼児がベッドから転落等することを防止するための幼児用ベビーガードであった。当該製品が取り付けられていたベッドは、マットレス一体型のベッドであり、当該製品のネット部とベッドの間には、約5cm の隙間が空いていた。	事故情報DB NITE SAFE-lite Injury Alert（傷害速報）
2017年8月	0歳9カ月	死亡	乳児（9カ月）を1人でベッドに寝かせていたところ、ベッド用落下防止柵とマットレスの間に挟まった状態で発見され、死亡が確認された。	事故情報DB
2009年7月	0歳	重傷	当該製品を設置したベッドに寝かされていた乳児が、保護者が目を離している間に動いて、大人用ベッドに敷いたマットレスと当該製品の間に入り込み、重傷を負った。	事故情報DB NITE SAFE-lite

乳幼児用ベッドを使用して就寝中の死亡事故事例

2 件の事故は、構造が類似する収納扉付床板調整木製ベビーベッドを使用中に、同様の状況で発生しました。

(1) 発生年月、被害者の年齢及び危害の程度

- ① 令和元年 6 月、8 か月、死亡
- ② 令和元年 9 月、9 か月、重症

(2) 事故概要（2 件の事故に共通）

保護者が、当該ベビーベッドに子供を寝かせて別室に移動後、子供の様子を見に戻りました。保護者が子供を発見したときには、当該ベビーベッドの収納部分の扉が開いており、敷具と収納部分の上枠の隙間から、子供は足から肩までがベッドの外に出て、頭部はベッド内でうつ伏せで、意識及び呼吸の無い状態でした（図 1）。

保護者は、事故前には収納部分の扉は閉じていたと認識していました。

図 1 事故発生時のイメージ
及び収納扉付床板調整木製ベビーベッドの構造



表 5 再現テスト

①		寝返りをした乳児の身体が接触するなどして、収納部分のロックが掛かっていない扉が開く。
②		ベッドの外に出た身体の一部の重みにより、ずり落ちるように、容易に腰まですり抜ける。
③		その後、肩まではすり抜けるが、頭部は抜けない。
④		後頭部が収納部分の上枠に押されたように固定され、口と鼻が敷具に押し付けられる。

出典元：消費者庁 News Release「木製ベビーベッドの収納扉が不意に開き 乳児が窒息する重大事故が発生！」より

幼児用ベッドガードを使用して就寝中の死亡事故事例

Injury Alert（傷害速報）

No. 70 ベッドガード使用時の窒息

事 例		年齢：0歳6か月 性別：男児 体重：8.0kg 身長：70cm 頭囲：44cm 頭横径：12cm 前後径：14cm
傷害の種類		窒息
原因対象物		ベッドガード（1,310×410mm、挿入するパイプ長380mm、厚み20mm） セミダブルベッド（本体：1,980mm×1,290mm×240mm、マットレス：1,980mm×1,200mm×220mm）に、ネット通販で購入したベッドガードを装着し、普段から児を寝かせていた。児が寝返りするようになり転落防止のため、友人からの口コミで当製品を購入した。
臨床診断名		窒息
医療費		5,260円
発生状況	発生場所	自宅寝室
	周囲の人・状況	患児宅では、普通のベッドに市販のベッドガード（L字型の一边をマットレスの下に差し込むタイプ：図1）を併用し、児を寝かせていた。以前から、ベッドと柵に隙間ができることを気にした母親が、タオルを隙間に詰め込んでいた。（補足：図2は、病院の患者用ベッドに装着した状態である。図3のように、中央のメッシュ部は伸縮性があり、製品をマットレスに密着させても簡単に隙間ができる。事案発生前も児の腕が度々隙間に嵌まり込んでいたため、図4のように、母親はタオルケットを丸めてメッシュ部に詰め込む工夫を行っていた。）
	発生年月日・時刻	2016年9月7日 午前11時00分
	発生時の詳しい様子と経緯	周産期や発達歴に異常のない児である。本児を伴った買い物から帰宅し、母親はまず児をベッドに寝かせ、その後車内の荷物を取りに戻った。児は覚醒しており、母親の姿が見えなくなって啼泣を始めた。約2分後に母親が戻ったところ、ベッドガードが水平にずれ、マットレスとの間に10cm弱の隙間ができ、その隙間に児の半身が側臥状態で嵌まり込んでいた（図5～7）。母親によると、顔面は半分程度マットレスまたはタオルケットで覆われていた。発見時、児の体動及び発声はともに認められなかった。けいれんはなかった。慌てて母親が抱き上げると、児はグッタリと閉眼し顔面にチアノーゼを認めた。完全に呼吸停止していたかどうかは不明である。母親は脈を確認する余裕もなく、児を刺激しながら救急要請した。電話を切った時点で児は呼吸をしていたが、反応が鈍く、啼泣しない状態がしばらく続いた。
治療経過と予後		救急要請してから17分後に救急隊が到着した。その時にはほぼ普段通りに啼泣を認めた。病院に到着した時には、意識は清明で明らかな神経学的異常を認めなかった。特に検査は行わず、経過観察を指示したうえで帰宅とした。3週間後に再診しているが、特に普段と変わりはないとのことであった。



図3 成人の腕を伸縮する中央のメッシュ部とベッドの隙間に挿入した状態



図4 メッシュ部とベッドの間にタオルケットを挿入し、隙間ができない工夫をしていた。



図5 ベッド柵とマットレスの間に落ち込んだ状態（頭側から）



図6 ベッド柵とマットレスの間に落ち込んだ状態（上方から）



図7 ベッド柵とマットレスの間に落ち込んだ状態（正面から）



図8 製品に取り付けられていた表示

大人用ベッドでの就寝中の死亡事故事例

ベッドから狭いスペースへの転落で発生した窒息
(No. 70 ベッドガードとベッドとのすき間で発生した窒息の類似事例1)

事 例		年齢：0 歳 4 か月 性別：男児 体重：7.1kg 身長：68cm
傷害の種類		窒息
原因対象物		ベッド、クッション
臨床診断名		蘇生後脳症（低酸素性虚血性脳症）
医 療 費		入院費用 1,998,240 円
発 生 状 況	発生場所	母方祖母宅の 2 階寝室
	周囲の人・状況	本児は 2 階の成人用ベッドで寝ていた。母は外出をしており、祖母 66 歳は 1 階で姉 5 歳、兄 2 歳の面倒を見ていた。
	発生年月日・時刻	2016 年 5 月 31 日 午後 4 時 50 分
	発生時の詳しい様子 と経緯	両親は別居中で本児、母（35 歳）、姉、兄は母方祖母宅で生活していた。母は本児を 2 階にある成人用ベッドに寝かせ、祖母に見守りを頼み仕事に出かけた。1 階で姉、兄の面倒もみていた祖母が、1 時間後に、兄がベッドと壁、窓の間に転落しているのを発見した。発見時、兄はぬいぐるみ、クッションのなかに上半身が埋もれ、下半身は出ている状態で、呼吸が停止していた。ベッド周囲の状況を図に示す。ベッドは高さ 50 c m で、ベッドから 30 c m 離れた窓にはサッシがあり、その間を転落防止のため縫いぐるみやクッションで覆っていた。普段からベビーベッドは使用しておらず、また兄のベッドからの転落を防ぐ措置は何もされていなかった。

